

第十五章 病理診断科プログラム

1. はじめに

学生時代は病理診断科との接点はほとんどなかったと思われませんが、現場ではどの診療科においても病理診断と関わりのない科はありません。内科からは内視鏡生検、EMR、ESD 検体が、外科系診療科からは手術材料が毎日のように提出され、治療方針決定に関係する病理診断を下す機会も少なくありません。

初期研修医の皆様が検体から最終病理診断が導かれる過程を理解できる医師になることを病理医は期待しています。病理医を目指したい方は相談にお越しください。

2. 初期研修の目標

下記の点について理解し、習得することを目標とする。

- 1) 当科では病理診断・細胞診断・術中迅速診断・病理解剖診断が主たる業務ですが、それぞれの標本作成のために知っておくべき内容が異なるため、これらの内容を正確に知り、患者様から採らせて頂いた検体を無駄にすることのない様にする。
- 2) 作製された標本から得られる顕微鏡的所見と共に、肉眼所見や基礎疾患の有無等の臨床所見の把握を踏まえる事が病理診断には必要であることを理解する。
- 3) 解剖症例を通して、全身諸臓器の機能・正常像・疾患について理解を深める。
- 4) 2年目の研修においては、日本病理学会病理専門医研修要綱に準拠しつつ、研修医の希望にあわせて研修目標を設定するものとする。(将来の進路に応じて集中的に病理診断を学ぶのも可。)
- 5) 病理診断科の研修を通して、患者様およびその御家族の立場を尊重し、他の医師および関係者と協調して医療にあたる基本的態度を涵養することを目指す。

第十六章 放射線科プログラム

1. 放射線科は3大部門である

1 放射線画像診断、2 放射線治療、3 核医学診断のうち主としてIVRを含む放射線画像診断を中心に研修する。

2. 短期研修（3ヶ月）の一般目標：

- 1) CTを中心として画像の読影と診断を実際にレポートを作成することで学ぶ。併せて検査目的に対する適切な診断Modalityの選択や検査方法の指示等について研修する。
- 2) CTで画像診断に関して導入部分を研修したあと、MRI、PET/CT、RIに関しても時間の許す限り症例を見るように努める。
- 3) 造影剤の副作用に関する知識を得て、実際に副作用症例に対応する。
- 4) 血管造影と動注や塞栓術など、心、中枢神経系をのぞく血管系IVRを行う。実際の血管造影手技を学び、血管解剖や所見の取り方などを学習する。また動注や塞栓術に関しての適応や方法を学ぶ。
- 5) CTや超音波ガイド下での生検や腫瘍ドレナージなど非血管系IVRを実際の手技を見てその方法を学ぶ。また画像からこれらのIVRの適応症例の拾い上げや方法の選択などに関して研修する。
- 6) 各科とのカンファレンスや院外の勉強会等に積極的に参加する。
- 7) 画像診断と実際の臨床経過や手術所見等との確認を行う。
- 8) 放射線技師や看護師などとの円滑なコミュニケーションを取り、日常診療、検査をチームワークとして行っていることを学ぶ。

※平成19年度から放射線科修練施設及びIVR修練施設となった。